「知る」ことの大切さ

福岡市立元岡中学校
鶴　樹里愛

「現在治る病気ではありません。」そう主治医に告げられたのは私が三歳の時でした。それからは検査と治療のため、毎月大学病院に通院しています。また、インフルエンザや嘔吐下痢など感染力の強い病気にかかった時は病院での管理が必要となり、今でも入退院を繰り返しています。

そんな中、「治らないから治る病気に！」とのニュースが目に飛び込んできたのは、小学二年生のとき、京都大学の山中教授がノーベル賞を受賞されたときのことでした。いつか私の病気が治るかもしれないと、先の見えない毎日の治療に光が射すと同時に、諦めていた自分の未来に希望が見出せた瞬間だったのを今でも覚えています。

その頃から、毎年家に協会の会報誌が届くようになりました。ついこの間も届いていたので母にどうして送られてくるのかと尋ねたところ母は次のように答えました。私の病気を治す研究を進めていくには莫大な費用がかかること、その研究には助成金として多くの税金が投入されていること、個人でも寄付できる制度があるので、出来る範囲で毎年寄付をしていること、そのお金がどのように使われたかが冊子として送られてくると。私が「税金って消費税？」と聞くと母は少し笑って、税金について一緒に勉強しようといろいろ話してくれました。

衝撃的でした。当たり前と思っていた学校生活をはじめ、日常の大半が税の恩恵であったことや、特に私は、子ども医療費助成だけでなく、小児特定慢性疾病医療費助成の税制度に長年助けてもらっていることも知りました。消費税が十％に上がるなんて嫌だなー、消費税がなかったらなあと買い物をする度に感じていたことを恥ずかしく思いました。それは、払うことしか考えず、その先自分の納めた税金がどう使われているか知ろうとしなかったことが原因だと思いました。

知らなければ気付けないことが、当たり前や普通の中にはたくさんあり、「知る」ということは本当に大切なことなのだと強く感じました。実際私は「知る」ことで嫌だなと思っていた後ろ向きな気持ちが、みんなのためになるならと前向きな気持ちに変わりました。〇〇税や税制度という言葉自体が、何だか難しい感じがしていましたが、知ってしまえば、私が安全に安心して日常生活を送る上でなくてはならないものだと理解できました。

私が病気に負けず将来に対して前向きな姿勢になれたように、税制度を通して、私も誰かの支えになれるのではないか、そうやって人と人が繋がっていけたらいいな、間接的な SNS みたいで面白いなとも思いました。今はまだ私に出来ることは限られていますが、治療を頑張り、これからも様々なことに興味を持ち、知って、多くの人を納税で支えられる大人になろうと思います。